



12月号をお届けします。執筆時点では、秋が深まり、木々の葉が黄色や赤に染まってきました。今年の東京の9月、10月は晴が少ない日々が続きましたが、ようやく10月下旬から秋らしい晴天が続くようになりました。

新型コロナウイルス感染症の状況に改善の兆しは見えず、11月中旬から連日過去最多の感染者数を更新し、感染拡大第3波の様相を呈しています。

11月6日に発表された9月分の家計調査報告によりますと、9月の消費支出は前年同月比10.2%の減少となっており、8月の6.9%の減少に比べて若干悪化しています。外食代は前年同月比21.3%の減少（8月は33.4%の減少）、飲酒代は前年同月比54.6%の減少（8月は64.7%の減少）と若干の回復が見られましたが、厳しい状況が続いています。GoToトラベルキャンペーンやGoToイートキャンペーンはそれなりに効果が出ているようですが、感染拡大が水を差すことになっています。例年でしたら酒類の消費が多くなる年末年始の動向が気になるところです。

芸術の秋ということで、筆者も久しぶりで博物館に行ってみました。東京国立博物館で開催されている「桃山天下人の100年」という特別展です。国宝の洛中洛外図屏風や花下遊楽図屏風など、教科書で見たことのある華麗な名品が数多く陳列されていて、戦乱の世が統一されていく時代の人々のエネルギーが感じられました。コロナ対策のためオンラインによる完全予約制となっていたので、比較的ゆっくりと鑑賞できました。感染拡大防止に配慮しつつ様々な活動も楽しみたいものです。

今年のノーベル賞が発表になりましたが、化学賞がフランス出身のエマニュエル・シャルパンティエ博士とアメリカ出身のジェニファー・ダウドナ博士に与えられました。受賞者が初めて女性だけのチームであり、研究発表から受賞までの期間がわずか8年と短いことが注目されました。受賞対象となったのは、CRISPR-Cas9（クリスパー・キャスナイン）を用いた「遺伝子編集」に関するもので、早くからノーベル賞間違いなしといわれた画期的な技術でした。受賞は時間の問題と考えられていましたが、問題は「だれが？」でした。CRISPR-Cas9を用いた遺伝子編集については、ダウドナ博士所属のカリフォルニア大学が特許を出願していますが、その後、ブロード研究所のフェン・ジャン博士らが真核細胞の遺伝子編集について特許を出願していて、紛争が生じていました。シャルパンティエ博士とダウドナ博士が基本技術を考案し、ジャン博士はヒトを含む生物に応用を広げたということで、ジャン博士も受賞するのではないかと予想もありましたが、基本技術開発者のみの受賞という結果になりました。

日本醸造学会のオンライン大会が、10月21日（水）から27日（火）まで開催されました。参加者総数は245名で、昨年の258名より若干少なくなりました。日本醸造学会のホームページからIDとパスワードを用いてログインすることで、42題の一般公演、日本醸造協会技術賞、日本醸造学会功績賞及び奨励賞の授賞式、3題の日本醸造協会技術賞の受賞講演、1題の日本醸造学会奨励賞の受賞講演のビデオを視聴することができました。初めてのオンライン開催ということで予期しない不具合にも遭遇いたしましたが、幸いなことにシステム全体のダウンというようなことはなく終了し安堵しています。リアルの学会大会では、座った席によってはスライドが見にくい場合もありますが、ビデオの視聴では小さな文字までよく見えました。また、難しい部分ではビデオを静止画面にしてゆっくり考えることもでき、発表内容の理解が進んだように感じました。質疑応答の時間も十分にあったので、充実したディスカッションが行われたのではないかと思います。ただし、学会大会が年に一度の会員間の交流の場であるのも事実で、その点ではさみしいものとなりました。来年度は、例年同様のリアルの学会大会を予定していますが、やむを得ずオンラインとなった場合でも、会員間の交流の場を円滑に実現する方策が求められると感じました。

これから年末に向かいますが、コロナの影響で今までとは違う師走となりそうです。長期予報では、この冬は全国的に寒いという予報が出ています。お体にお気をつけて新年をお迎えください。